

体内温度上昇計測10秒

首都大学東京 熱中症予防に活用

首都大学東京の松井岳巳教授らは、熱中症の症状の一つである体内の温度上昇を10秒で判定するシステムを開発した。運動や作業の合間にこまめに測り、予防に生かせる。従来の計測技術は約15分かかっていた。3年以内の実用化を目指す。新システムはセンサーで心拍数、呼吸数、体表

面の温度を測る。計測値から、熱中症の目安となる体温を超えているかを推定する。新システムを使って短時間の運動をした成人9人の深部体温が

セ氏37・5度を超えていたところ、ほぼ正しく判定できた。深部体温がセ氏38度を超えていれば、熱中症発症のリスクが高まる。今

後は推定に使う計算式などを改良し、セ氏38度を超えたかを正確に判定できるようにする。首にセンサーを当てるだけで済む小型装置も開発する。